

第640号
令和4年10月15日

東北税理士会

東北税理士会報

発行所 東北税理士会 〒984-0051 仙台市若林区新寺1丁目7-41 電話 022-293-0503
発行責任者 会長 高澤 圭一 編集責任者 広報部長 齊藤 真紀 印刷所 (株) 孔栄社
ホームページアドレス <https://www.tohokuzeirishikai.or.jp/>



朱色に染まる須川湖 (秋田県・須川湖)

山本 登 (秋田南)

偏在する税理士

東北税理士会50支部中、個人会員が20人以下の支部が20支部ある(令和4年7月末現在)。東北においても税理士が都市部に集中していることを示しているが、経済活動が活発な都市部に集中することは至極当然なことではある。

では、人口が少ない地域で税理士は不要かといえば、それは違う、と断言できる。全国津々浦々どこでも税の話はついて回るし、年々複雑怪奇になっていく税法に振り回される納税者は多い。迷える納税者が相談で

きる税理士の人数が地方では絶対数が不足しており、税理士会が行う税務支援事業もその影響を受けている。支部会員20人以下の少人数の支部では、税務支援事業において支部長はじめ支部会員が毎年大変な苦勞をしていることと思う。

現実味がないといわれそうだが、風光明媚でも優しい(と思う)田舎で税理士をしようと考える人がいないものかと最近真剣に考えている。

(副会長 高橋 龍二)

随筆

父、私



石巻支部 丸岡美穂

先日、自宅で、3年前に81歳で他界した父の名刺ケースが出てきた。日税連のマークが金色に描かれた春慶塗の立派なそのケースを開けると、旧姓の私の名刺がいちばん上に収められていた。私が東京で勤務を始めた外資系会計事務所のもので、父の字で、03から始まる私のアパートの電話番号も書き加えられていた。

父、平塚善司は24歳の時に税理士試験に合格、昭和38年に25歳で事務所を開業した。税理士登録番号は13625、日本の税理士登録者数がまだそれくらいだった時代、日本は高度経済成長期で、開業したばかりでも関与先には困らなかった。父は8人きょうだいの6番目で、長男であった。家は明るくにぎやかで、教育熱心ではあったが、祖父の事業の失敗や戦争などにより、貧しい生活を余儀なくされた。経済的理由のため、大学進学という選択肢は初めからなかった。目標のない日々を送る中で、税理士という職業を知り、志す。当時の受験資格である税理士事務所5年勤務という期間は到底待てず、日商簿記1級を受験するが、ハードルが高い。何度か不合格となり、祖父から、諦めて地元役場に就職せよとの話。「やめっぺ！」友人たちとのお酒で、受験勉強に別れを告げようとしていたところ、「平塚さん、あんた、間違ってるよ！今まで何のために頑張ってきたの？」先輩のご母堂に厳しく諭される。心をリセットして再チャレンジ。日商簿記1級も、税理士試験も、苦学の結果、ほどなく合格。父の葬儀で弔辞をお願いしたその先輩から、後日「美穂ちゃん、これ読めなかったから」と手渡された父への別れの手紙には、何枚もの便箋に、まるで昨日のことのように鮮やかに、高校時代からの思い出が綴られていた。「税理士試験の受験時代は、君は本当に荒れていたね」とも。

父は、豪放磊落で、いつも明るく、時々ちょっと皮肉を言う。カラオケでいつも盛り上がり、アカペラで「マイウェイ」やロシア民謡も歌う。飲めばとことんまで飲み、我を失う。父を知る人は、開放的だとの印象が強かったと思う。他方、繊細で細かいことが気になり、傷つきやすく、心の中で葛藤を繰り返す、という面も共存していた、というか、本当はそちらが本質で、それを隠すために陽気に振舞っていたのではないかとも思う。事務所は、順調に関与先が増え、成長。50歳の誕生日に、地元のホテルにてリサイタルを開催。私たち4人姉妹は子どもの頃から何度もそのことを聞かされ、毎回当日の役割分担を言い渡された。「美穂はお客さんの案内係な」同じく50歳で、母とオリエント急行の2週間の旅。これも、随分前から計画し、周囲にも公表。車中、上流階級の乗客とともにラウンジで優雅なピアノ演奏を聴く。日本人乗客がいる、と、ピアニストが「ここに幸あり」を演奏すると、父は立

ち上がり、ピアノに合わせて歌を披露。次々に日本の歌を繰り出すピアノ伴奏に、父が応え、オリエントエクスプレスは拍手喝采。世界のセレブと、宮城の沿岸部出身の乗客が肩を組んで和気あいあい。皆、笑顔になったんだよ、と母。60歳の時は、母とクイーン・エリザベス2世号での世界一周旅行。これまでの人生で経験したことのない、別世界の1ヶ月。2人とも「帰りたくない」。

60歳で黄綬褒章受章。税理士会や関連団体、法人会等々で要職を歴任。堅苦しさはほどほどに、という感じだったのではないかと思う。

とはいえ、「自分の中でいちばん重いのは『岡田劇場がんばれ会』の会長かな」終身会長であった。岡田劇場は、日商簿記1級断念を覆した「恩人」の家業。東日本大震災で岡田劇場はすべて流失した。

関与先とは、年齢を超え、多くを語らずとも、通じ合う。私の言葉など空虚。父の笑顔が関与先を痺れさせる。父の存在が今、ここになくても、関与先の心には、父が生きている。関与先と税理士事務所という関係を越えた、父より一回り年下の関与先の社長からの手紙が、父の手帳に大事に挟んであった。父の酒量を心配し、諫める内容だった。

事務所内では、時々ネガティブ発言。皆黙っている。一度だけ反論。私の言葉に共感する幹部職員がいた。父は75歳の時、所長を45歳の私に譲る。私たち親子に相談もなく、そのタイミングを決めたのは、私の反論に共感した幹部職員。父も私も既成事実を知るのみだった。ネガティブ発言をしそうになった時、こらえて出す代わりに言葉は、「まあな」。私が代替わりをする前の数年間は、よく耳にした。

亡くなる3日ほど前、レンタルされたばかりの介護用ベッドに横たわり、「ビール飲みたいな」母は「病人だから」と反対。私は「いいんじゃない」とグラスにビールをついで手渡す。「おおー、しばらくぶりだ飲もうまいな、つま先まで沁みるな」代替わりして6年、お父さんのネガティブ発言も分かるようになったかも、と言うと、「そうか、分かるようになったか」その晩は、いつになく饒舌に、母といろいろな思い出話をしたとのこと。市に依頼していた介護認定調査の結果が来たのは、父の葬儀の数日後。ヘルパーさんのお世話にならずに生きることができたね。

汗だくで走り回る私の喪主ぶりを黙って応援するかのよう、かつて見たことのない数の父への惜別の花輪が、式場とその外周を取り囲むように飾りつくされている。誕生直後から溺愛している同窓高校2年の初孫からのお別れの言葉に、どう返したかっただろうか。彼女の誕生日は父の命日の翌日。忘れないでくれよ、か？頑張れよ、か。